

と思はれる。

で、碓か子姉の妹子向小やうに、一飯位と

取つて、相手と幾分か下月二視る、さりふが

ら頼急すゝのではふい。頼急すゝ一兩は取

手と疎外すゝのどが、こは疎外すゝどころ

か、~~手~~手と把つて言に挽字うせゝと謂はうか、

優しい、~~手~~厭と云ひせゝ大と富ゆふくす一歴制

気味と念奪めて、諍々とを教ふゝやうに、論

すやうに説出ゝとのは芸習の教である。

済子の説くに依ると下ま、長江の立脚地は從歌間



れぬといふ事であらうから、強ち其を肉をか

りに根ざしと事^目とは泥をぬ^目ければ、其

極情味といふものは畢竟真情の^對過きぬの

で、かの^{熱烈}神^佛の^一信^仰の^靈火^子肉^を焼^し

淨と云はざる肉と燒盡し、我^らの^肉の^味を

も留りず、化淨無垢の、木^邊不^滅の^真情^の子

と云つて、求^むるといふ私^意もふくて自^れの

神^の御^意と契^合會^得境^地に^比べ^れど、實^に淺

慕^ひ、^愚か、^呆れ、^ちい^{もの}ど、^從て^其稱^めの^味は^氣と

但^しも^もめ^禮せ^し次^に申^す念^んと^肉の

分子に控はれて、急の如く起る、
~~其の~~ 起るは

其の 其の 汚濁のやうなものに托して ~~い~~

記憶に留まらぬので、
~~↑~~ ↑ 眼の ~~光~~ 体 ~~は~~

~~小~~ 情 ~~味~~ と ~~母~~ 候 ~~り~~ ら ~~る~~ て ~~心~~ の ~~留~~ め

うちは出来ぬ、去る者もと疎しとは、
内なる ~~心~~ の ~~新~~

の ~~行~~ く ~~を~~ り ~~小~~ の ~~で~~、
の ~~本~~ 体 ~~と~~ ~~其~~ 情 ~~を~~ ~~到~~ つ ~~て~~、
不乗

不云、不壊不滅である、
自覚して此喜情の本

体に生じる者 の ~~愛~~ を ~~け~~ ら ~~れ~~ ば、
愛は ~~其~~ の ~~愛~~ を ~~け~~ ら ~~れ~~ ば、

尚小に送らぬけれど、
其情の ~~心~~ の ~~は~~ ~~其~~ 情 ~~と~~

便の外はふいかり、
人間といふ位 ~~の~~ ~~言~~ へ

ば、其れは貴い、
其れが濃くは濃い其れは貴い、

小夜子の認めと其れのみき、
平生ざらに此途

小川のではふい、
其れのみき保いて

忘れられぬ處に、
神々のまはす、
樹影は依在

すゝから、
どうか其れから
て信仰

に入つて貰ひとい、
一旦信仰の人となつたら、

武州に向ふ小夜子の愛は
所謂聖愛で、

其れは万幸の縁も、
福々々の如く、
少しも衰

らずにあらうけれど、
それと同時には小夜子の

心と其れは、
他人とも赤武州の

かく愛す邪魔にはまらぬ、神の御座るを二方の

天に見えやうとて、それが少しも武水と思ふ

真心の隠はふらぬ、もう井冷せぬとが、

すことかいふ問は、水・林に委せて置けど

よいことで、林の子の分際として共林はこと

を心配するには及ばぬ。

トかろいふ意味の事と、言葉の碎れと、林

り散らすそゝぬ小夜子の心子も合路の行くや

うに熱心な説いと。小夜子は友の意気も先づ

気と吞下して、右靴の教と独るといふ教の度

心かりで甘ふく、
何れ何とふく^ガ泣^クつて、

只^ニ然^ル然^ルしくふと。
~~此~~ ^{終子}初^ハは^ニの^イ

ふるがゆり常^ニ漸^シと外^レれてあ^るの^を、或^ハを^知ら^ぬ

るに^ハ疑^ハし^との^をむ^すま^いか^と疑^ハせ^れ、
係^ルれ^ル係^ル

身^ノ毛^ガ除^スま^つこ^こと^もあ^つと^が、
其^中子^信

全^クの^行つ^とや^うの^處も^坐て^来と^かと^思ふ^と、

其^次の^観言^葉は^何の^事も^も意^味の^なら^ぬ六

しい^言で、^常か^ら其^意味^を取^へて^ある^申に、

終^子 ~~其~~ ^は ^先へ^くと^説述^ので、^意味^の

も^やく^と
紛^れか^つて、^から^らな^くつ^て、^果を^説也^として

あし中に、
まゝ一言二言言葉々分つて来て、

混んとして流れる言葉の端と逃つて行く中

に、
まゝもやくとや。で、
安きに流子

ふらふらと流るる

め流はつと流は少分かつとが、
唯其流滅子

動うとれと。
何やうかうか何とかしと、
貴女

は私や妹どから、
妹が便~~り~~、
夫に死別れ

て ~~流~~ 流いてる、
心~~根~~ ~~り~~ ~~便~~ ~~り~~ ~~の~~ ~~私~~ ~~の~~ ~~流~~ ~~か~~ ~~す~~

に居らりやうと言つて、
流ると ~~流~~ 流かれと暗

には、
理窟は少ともわらぬけれど、
何となく

此人は我婦也、
知らずるとのが、
端

く分つて今名をり金つてあゝやうに心持に
 つて、何ふふしに、懐しいやうか、悲しいや
 うに心持にたつて、覺はず次で往くのであ
 つと。

かゝして二人とも時の移るを忘れず瞳しく

涙金らすよと、ふと次の間に何やら人との

しとのが平へ入つて、振り返ると円珠の合

ひの禮を聞かた。

いさうと思つたが

おし、
 深くお出で下さりませ。

トいひく、這入つて柔への、六十許の

好い、此の音の響くワルリと流けと老人。

「あら、阿女さん、吃驚しとぢや有りません

か、老實に「ト小夜子は（身を用いせ、と涙。

「ほう、さうか、私何も驚かす氣もなかつ

し、（が）活る身う入つこからぢや、け、

は「ト（快よ）平指々々大幸に笑つて、（）清子の常圓と

清りとりてあつのと（）旅（）や、

それでは忍入ります、（）行幸共得に、（）おるは

伊遠方の所を（）遊しつ出下されずと、（）共（）旅（）や、

ト正直に取次いとら一語は片ふるにぢやうさ

うに、学校あつた子も挨拶に当惑して、唯黙つてお辞儀するのみであつた。

「お父さん、そんなに去口上と違へると、終

子さんうお困りませうよ。」

ト娘も泣きさかして。

「は、さうかな、^{やい}兎角老人は昔形氣で、^{とらふ}こ

と男言うんうとぬと、跡のお流りつかへて出

て来^までな、ハ、ハ、ハ、ハ、

ト高笑として、赤とウルリと撫て、ケロリ

とヤ。